

◆柳井勇のCDファーストアルバム「音手紙」全12曲

- ・南米フォルクローレのテイストを軸にしながらリズムの祖、アフリカ、そして忘れてはならない日本人の心とが融合する独特の音世界。
- ・ケーナ、サンポーニャ、チャランゴ、ギター、ボンボ、チャフチャスなどによるアンサンブルが基本で、他にジェンベ（ジャンベ、ジンベ）などのアフリカンパーカッションや木製箱型のカホンという打楽器、日本の篠笛が使われたりもする。ゲストミュージシャンによるエレクトリックベース、アコーディオンが使用された曲もある。
- ・歌ものが8曲。器楽曲（インスト）が4曲。歌詞は全て日本語だ。
- ・全体的に癒しと安らぎを与える曲が多い。

<曲解説>

1.米の酒と笑い声と自慢ばなし 作詞・作曲 / 柳井勇 【2001年録音】

不思議なリズム。「カポラル」という形式（楽曲のリズム&スタイル）。聴いているうちに体内に取り込まれて鼓動と一体化する。歌詞は作者の暮らす今、そのもの。

2.黒い瞳の娘 作詞・作曲 / 柳井勇 【2002年録音】

形式「ワイニョ」。チャランゴという弦楽器のかき鳴らしによる変幻自在なリズムが特徴。繰り返しの多い歌詞とメロディーが印象的で知らないうちに覚えてしまう。

3.音手紙～モグラ～ 作曲・添え詩 / 柳井勇 【2000年録音】

情緒のあるインストゥルメンタルナンバー。サブタイトルの通りモグラの添え詩が付いており、聴きながら読んでもらうという仕掛けだ。ある環境問題がテーマのイベント用に制作した曲。憂いのあるサンポーニャの音が身体に染み込む。間奏のメロディーに作者の日本へのこだわりがうかがえる。

4.銀の首飾り 作曲 / 柳井勇 【1999年録音】

どこかスペインの香りもするインストゥルメンタルナンバー。ケーナ、ギター、サンポーニャの見事な絡み合い。何度聴いても飽きない。

5.強がり一人芝居 作詞・作曲 / 柳井勇 【2007年録音】

形式「トバス」。今やフォルクローレの定番の一つになったこのリズム。華やかでキャッチーな曲が多く人気が高い。この作品も「トバス」らしさ満点だ。

6.風車 作詞・作曲 / 柳井勇 【2000年録音】

なんと悲しい歌だろう。形式「カルーヨ」。カルーヨは悲しい歌が多い。この独特のリズムの揺らぎが癖になりそうだ。アコーディオンが使われている。ケーナより長い「ケナーチョ」という縦笛の音色がまた物悲しさを誘う。

7.ラ・クカラーチャ 曲 / トラディショナル 作詞 / 柳井勇 【2007年録音】

メキシコのトラディショナルにオリジナルの歌詞を付けた。「主人公はゴキブリだけど意味は広くて深いんだ」と作者談。ケーナの演奏とアフリカ譲りのリズムアレンジ。つつい身体が動き出してしまふ。

8.七尾 作曲 / 柳井勇 【2007年録音】

吹いている笛は「篠笛」。日本の横笛だ。まるで言葉のように語りかけて来る。作者は笛も作る。この笛も本人手作りだという。石見太鼓保存会という和太鼓グループの曲の挿入曲として作った旋律を基としている。

9.線香花火 作曲 / 柳井勇 【2007年録音】

フォルクローレには欠かせない小さな弦楽器チャランゴによるソロ。本人いわく「僕にはこれ以上うまく弾けない」となにやら謙遜な作者。タイトル通りとっても綺麗な曲だ。

10.ちぎれ雲 作詞・作曲 / 柳井勇 【2006～2007年録音】

アルバムを象徴する名曲。まさに生まれ育つ里の風景。演奏には神楽笛も使っている。現代的なリズムアレンジと民謡風の歌詞とメロディーが違和感なく融合する。米を作って生きて来た日本の「心」と「季節」が歌い込まれている。島根県松江市出身のシンガーソングライター六子がこれをカバーしアルバム「心唄2」にも収録されている。

11.今日も有り難う 作詞・作曲 / 柳井勇 【2007年録音】

今では日本でもポピュラーとなったアフリカンパーカッションのジェンベをフューチャーしたまさにアフリカンなリズムアンサンブルだ。作者は根っからの打楽器奏者でもあり、叩きだすリズムはたちまち音楽に躍動感を与える。

12.帰り道 作詞・作曲 / 柳井勇 【2007年録音】

独特の粘っこく弾力のあるリズムが気持ち良い。形式「ワイニョ」。演奏、歌ともに優しさであふれている。短い歌詞には、逆に多くの意味を含むもの。聴く人それぞれの思いに重ねて聴いて欲しい。

A handwritten signature in black ink, appearing to read 'RYO YANAI' with a stylized star or symbol to the right.